



早稲田大学大学院文学研究科博士学位請求論文

# 舞踊の意味を生成するものとしての身体

## 概 要

2003年2月

早稲田大学大学院文学研究科芸術学（演劇）専攻  
博士課程2000年3月満期退学

石 渕 聡

この研究の目的は観客が舞踊を見る際のその享受の仕方を考察し、舞踊における身体認知及び舞踊の意味生成のあり方を構造化することである。以下にその論文構成と結論の概略を記す。

## 1. 研究方法・論文構成

この論考では3部9章に分けて議論が進められる。全体を通じては、第1部が基礎研究、第2部が諸概念の再検討、そして第3部が舞踊の認知構造の構築という流れとなっている。論述の視点は、第1部の現象学の理論を基盤としながらも第2部でのジャック・ラカンの精神分析学における鏡像段階の理論、記号論、メディア論等、さらに第3部での言語をモデルとした認知理論に至るまで多岐にわたる。しかしながら、全体として一貫して「舞踊が観客にもたらすもの」を考察対象としており、観客が舞踊を見る経験の構造を分析する視点を取っている。以下にその方法と論旨の流れを記す。

第1部では基礎的な作業として舞踊論における現象学的考察の方法と諸概念の基礎づけを行う。

第1章は、現象学的探求の一般的なありかたと舞踊理論における現象学の意義を検討する。第1節では(1)現象という用語概念、(2)形相、(3)無前提性の要求、(4)全体的単一的な現象、(5)志向性について論点を絞って議論を進める。第2節では舞踊研究における現象学のより実践的な参照の方法を検討する。また、マクシーン・シーツの現象学に対する考え方を検証し、舞踊における現象学的考察の展望を明らかにする。

第2章ではスザンヌ・ランガーの芸術論全般及び舞踊理論を検討する。というのは、シーツの舞踊の現象学的考察における主目的は、ランガーの舞踊理論の現象学的基礎付けであるからである。したがって、シーツの理論を分析するためにはランガー理論に対する理解は不可欠である。また、ランガーの理論はそれだけをとっても舞踊を視覚的に現れる一つのイメージとして規定した点で、この論考には深く関わっている。特に第2部以降からの本稿の仮定的前提として、身体を舞踊の産出する一つのイメージとして捉えなおすことになるが、それはランガーのイメージ論がモデルとなっている。身体の問題に関しては、そこでは虚の力を作り出す基体としての物理的なレベルでの身体と通底する身体を見いだすことができる。つまり、ランガーの方法によって舞踊を一つの全体的な現象とするということは、舞踊を存在性を失った「虚」の現象とすることであるので、その中では我々と日常レベルで関与する身体は排除されてしまうということである。そして、ランガーは最終的には舞踊を「動的な線」という形相に還元することになるが、舞踊をその生成過程において現実から虚に移行させる際に用いられる「身振

り」という概念はランガーの一つの舞踊の身体である。ランガー理論において身体に出会うことができるのは、まさにこの「現実を虚構へ変換する身ぶりを作り出す身体」ということである。

続いて舞踊の現象学的理論のモデルとしてシーツの理論を分析する。特にランガーの理論との関係を中心に構造分析をしていくが、そのことによって、シーツが舞踊論に現象学を導入した方法を明確にする。また、シーツ自身の研究がランガー理論の分析であったことは、より広い視点で考えると、従来の理論を別の理論をもって発展させるという一つのモデルともなっていると言える。このことは舞踊理論の方法論に有意義な視点をもたらすであろう。そしてこの章では、シーツの理論の中にランガーの虚の理論を我々が生きる身体へもたらすような修正が図られていることが確認されることとなる。シーツは虚の力が舞踊を反省に先立つ知覚によって捉える時にのみ現れて、またダンサーも前反省的に踊るときにのみ虚の力を現れさせることができるという考えを進める。シーツはランガーの虚の力の性質分析において舞踊の本質を4つの形相（「線の性質」「緊張の性質」「広がり の性質」「発射的性質」）に還元するが、それらを統一的な全体的な一つの現象と捉えることはランガーと同じである。しかしながら、ランガーと最も立場を変えていることは、このような現象がすべて我々の舞踊を見るときに生きられる体験に根拠づけられており、そこには観客もダンサーもそれぞれの身体的存在であるということが考えられているということである。シーツの理論において舞踊という現象に関わる「生きられる身体」を見いだすことができる。

第3章は、第2章までに分析した舞踊論及び現象学の諸概念を用いて、舞踊理論の基礎概念を考察する。ここでは、舞踊における時間、空間、身体の問題が扱われるが、現象学に関しては、特にジャン＝ポール・サルトルの『存在と無』における概念を参照している。それは、サルトルの現象学における理論が比較的他のものに比べ構造的で明快さがあり理論として援用しやすいことと、特にダンサーと観客との関係において身体を問題化する場合、サルトルの理論は例えば「まなざし論」など示唆に富んでいると考えられるからである。空間論に関わる身体的な問題に関しては、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』における身体図式概念、時間論と舞踊の身体存在レベルの考察ではサルトルのものに依拠することになる。この章の最終節では、ダンサーと舞踊と身体の関係性をそれまでの議論をもとに考察する。この章の身体に関わる問題では、舞踊という状況におけるダンサーの身体のありかたから舞踊の中で「空間を創造する身体」を考察し、また、サルトルの身体の3次元の存在様態を参照し、そこから「ダンサーが生きる身体」「ダンサーが観客に見られる身体」そして、「ダンサーが自分の身体が観客に見られるものであるということに自覚的になること（離見の見）で存在する身体」というような一つの分別の視点を検討する。

第2部では、舞踊の身体というものを舞踊が芸術として備えている構造（見せることを目的として創作され、観客の前で上演されるという構造）から再び定義し直し、それをめぐる周辺的な問題も視野に入れて考察を進める。それぞれの章はテーマとして比較的独立しており、援用する理論としても、第4章ではジャック・ラカンの精神分析学における鏡像段階の理論、第5章でテキスト論、第6章でメディア論というように論述において取る視点も多岐に渡っている。しかしながら、第2部全体としては、現象学の志向性の問題を関わらせながら、舞踊における身体概念を再検討し、舞踊あるいは舞踊理論における固有の身体概念を構築することに向かっている。

第4章では、再び舞踊と身体との関係を検討し、舞踊の身体が我々が生きる身体とは別のもの、すなわち、舞踊が産出する固有の身体であるということについて検討する。ここでは第一部の概念を基盤としながらも、論点を「舞踊芸術が観客に向けて表象する身体イメージ」という方向へとずらしていくことによって考察をすすめることになる。舞踊媒体としての身体が舞踊芸術の構造という視点から否定されることになる。そして、第1部の存在論的な議論から導出された身体とは別に、ダンサーの生きる身体が舞踊において別の身体を引き受けるような在り方が検討され、それが観客が受容する舞踊の身体とは別のレベルにあるという構造を考える。つまり、舞踊に関わる身体レベル分けを、第1部とは別の視点から行うということである。この議論は、第1部で問題化されていた「離見の見」によって出てきてしまう、ダンサーの反省的な身体のあり方に一つの整理を付けることへ向けたものでもある。また、この「身体引き受け」の構造においては「ダンサーが引き受ける身体」と同時に「観客が引き受ける身体」も顕在化させることが可能であった。

第5章では、舞踊において何がどのようにやりとりされているかというコミュニケーションに關与する問題を、舞踊のコンテキストの問題に広げて考える。また、その問題に関連して舞踊が舞踊として認識されるということはどのようなことかということを考察する。つまり、「舞踊とは何か」という本質論的な問題を「我々は何を舞踊であると判断するか」ということにすり替えることによって考察を進めるわけであるが、この場合、舞踊が実際に行われていない時、すなわち、舞踊が現前していない場合の判断も加えて考察する。また、舞踊が現前する場合には、舞踊に内在する諸契機の中で、「動き」というものがここで具体的な判断対象として考察される。前半部では様々な局面でやりとりをされる舞踊のコミュニケーションのあり方を検討し、そこで出てくるものは例えば「型」ともいうことができるようなものや「振付家がイメージとして抱く身体」など舞踊が現前していない時に表象される身体である。そのような我々が経験を通してあらかじめ持っている「舞踊の原型としての表象としての身体」を後半では動きを伴う身体に対する我々の持っている知として捉え、それは「舞踊として知っている動き」と「舞踊でないものとして知っている動き」という判断基準が成立しているということ、そして、そ

のような基準が肯定的に作動しない「未知の動きを伴う身体」というものを見いだしてゆく。

第6章では舞踊の媒体の問題が取り上げられる。というのは、この論考では、舞踊の身体は舞踊の媒体ではないということが検討され、理論が組まれることにもなるが、それによって今度は舞踊の媒体とは何かという別の問題が残されてしまうのである。ここではマーシャル・マクルーハンの『メディア論』における、媒体の解釈を援用することによってその問題を考察する。媒体とは常にその状況によって変化をするような動的な視点が取られることとなる。また、身体と動きという関係性も媒体という視点を取ることによって、2通りの解釈が提示されるが、このことは特に舞踊媒体としての道具的身体の議論と深く関わることである。この議論において、舞踊の中に見いだされるものを舞踊に運ばれるものとしてのみ考えた場合、それら全てを連関づける機能を備えているものをダンサーとして見だし得ること、またそのような意味でもダンサーは舞踊とほとんど同じにしか捉えられないということを考える。そこで我々が見いだした身体はダンサーの身体であるが、この場合も、身体がダンサーによって運ばれるものという限定をつけて、その性質を考察した。また、ダンサーが我々にもたらすもう一つの要因として「動き」というものを想定し、身体と動きの関係を観客の志向のベクトルを含むことによって空間性と時間性に関連づけて考察する。また、ダンサーが舞台上から姿を消すあり方で「舞踊空間に不在であることを主張する身体」も舞踊作品にとっては一つの構成要因として考えることができる。ここで媒体はあるものをもたらす為にそれ自身は透明化するという構造は第9章でそのまま用いられる重要な図式である。

第3部では舞踊の認知の問題、意味の問題を考察する。方法としては舞踊の意味の問題について、身体の意味の問題から出発しそれを言語的な意味の領域と照らしあわせることで分析を進める。第3部を通じて、舞踊の意味あるいは身体の意味ということを考えていく際、分節性という概念を用いて考察を進めている。これはもともと言語学やゲシュタルト心理学及び認知意味論で用いられる語である。この概念を援用したのは、我々が舞踊を前にして、そこに身体的なイメージを見い出す際、それが理解できるあるいは捉えることができるということは、その身体が一元的な全体的な不可分な「身体」としか言いようのないものではなく、その中にある要素、つまりより小さな構成部分を見だし、なおかつ部分と全体という関係性を見て取っているということがそれを可能にすると考えられるからである。

第7章では舞踊と身体が最も言語的な意味を共有する場として「身ぶり」を取り上げることによって、舞踊の中の身体が持つ言語的な意味の様相を分析する。そこでは身ぶりが舞踊において言語媒体として機能する側面から考察するが、反面、それが舞踊において言葉の意味の一貫性を挫く役割を果たしており、そのことが舞踊固有の意味と深く関わりがあるという問題を考える。これは第2章で検討したランガーの「現実の身ぶり」と「虚の身ぶり」の議論を受け

る形での考察であるが、議論の方向性は全く異なるものである。というのは、ランガーにおいては「身ぶり」はあくまでも舞踊を現出させるために不可欠な前－舞踊的な要素であることに對して、ここで論議される身ぶりは、身体と言語との関与性のみの問題を扱うことによる。身ぶりに對する考察から、それが舞踊に言語的な意味を運び込み、なおかつ舞踊の中でそれを解体する機能を備えていることを検討した。すなわち、ここでは2つの身体が成立することになる。一つは「言語的な意味を舞踊に運び込む身体」と一つは「舞踊において言語的な意味を解体する身体」である。また、この章の後半では動きが舞踊における非言語的な領域と関与するものとして検討される。つまり、言語的な意味を備えていない身体の動きの連なりというものを想定し、その動きの中にある分節性を見いだすことを試みる。そこでは「舞踊の動きの単位としての身体」を問題化する。

第8章では舞踊における身体の意味表出の問題を身体の記号機能のシステムという視点から検討する。ここでは舞踊において全く言語の意味を担っていない身体というものを仮定して、その「純粋な現れとしかいいようのない身体」がどのように知覚のレベルを越えて我々の認知にもたらせられるかという問題について考察する。我々が身体を日常において認知するということが、徹頭徹尾言語の意味のもとで行われているという構造を検討することによって、舞踊の身体認知及び身体の意味生成の問題に對して一つのモデル概念を作成する。つまり日常的なレベルにおける身体の認知のされ方がそのまま、舞踊における言語的な意味を帯びた身体の認知に引用されているという様相を考えることによって、その言語的な意味を帯びていない身体をネガティブに分別するという構造である。ここでは「言語によって分節される身体」がその分節契機となる。

第9章は、第7章で考察した言語と動きの問題を改めて身体との関係によってより構造的に整理し、そして第8章で導出された言語と連関する身体の意味生成に機能する分節性の構造をもとに、観客が舞踊を享受する際の認知構造を分析する。ここでは舞踊を言表作用の次元で捉えることによって、舞踊の産出する虚構世界、舞踊の身体の観客による認知の問題等が総括的に構造化される。そこで我々が規定した身体は物語の役柄など「言語的なテキストの意味を表象する身体」「行為言語によって分節される身体」「舞踊言語によって分節される身体」「不可解な身体」及びこの不可解な身体を捉えようとする「認知の雛形化によって捉えられる身体」である。このように身体認知と言語との関係を検討することによって、我々が舞踊を理解にもたらそうとする認知のありかたに對して一つの構造を見いだすことが可能となるのである。

## 2. 結論

各章で考察したそれぞれの身体は、舞踊の中で創作過程と上演時の2つの次元に分けて考えることができ、またさらに上演の次元ではダンサー側と観客側の2つ領域に分けて整理をすることができる(図1)。

まず振付家の抱くイメージが既に舞踊の身体表象と関連していることは本文中でも述べたが、ダンサーと振付家が別れているかぎりでは、創作過程に位置づけられることは妥当であろう。もちろん、即興舞踊のようにこのレベルが同時に進行するような場合もあるので、完全に舞踊の外側におかれることにはならない。また、この論考で一貫して否定してきた「道具として用いられるダンサーの身体」であるが、この身体は創作過程に位置づけることによって、その存在までも否定することにはならないことになる。例えば、ダンサーが振付家から与えられた振付が身体がそれを無意識にできるようになる以前は、ダンサーにとってそれが筋肉と関節を持った意図的に操らなければならない一つの道具として存在する局面があることも認めることができる。また、ランガーの理論において、舞踊のもととなる虚の身ぶりに変容する以前の現実の身ぶりをなす身体も同様に位置づけることができる。舞踊が現出する以前の段階である創作過程においても、そこには舞踊の意味に関与したことがらが全くないというわけではない。ダンサーが振りを習得するというのが、舞踊の身体の意味と近いもの、すなわち、振付られた身体の分節性を捉えているからこそできることであろうし、ランガーの現実の身ぶりにせよこれは物理的次元の動きを示したもので、そこにはダンサーにとっては認知可能なもの、つまり、虚の身ぶりへと変形可能な意味をもった対象なのである。しかしここでの意味のあり方はあくまでも、舞踊の意味そのものではないということは留意すべきことであり、それは一つは観客の存在を欠いているので舞踊を捉えるという次元で論じることができないということと、また舞踊の意味に関与するものが舞踊という事象の外側で機能する様相があるということにおいて重要である。

次に舞踊の意味が生成され受容される次元であるが、この次元を「踊る」ということと「見る」ということに分け、その境目に第一部で導出された「ダンサーが観客に見られる身体」を位置づけることができる。ダンサー側の領域では第1部で検討されたように「ダンサーが生きる身体」を中心として、我々が日常的な次元においてもそれを生きている身体の様相をそこに位置づけることができる。舞踊の内側という考えで捉えたとすれば、ダンサーの生きる身体はダンサーにとって「踊る」ということの内部でのみ存在する身体である。ここでは身体はダンサーそのもののあり方であり、その原初的な意味とは本文中で触れたようにダンサーにとっての「いまーここー舞踊」であり、自分の身体がそのまわりの状況に応じていくようなあり方をいうとするならば、その都度の外的状況を捉えていくことそのものが意味付与行為となってい

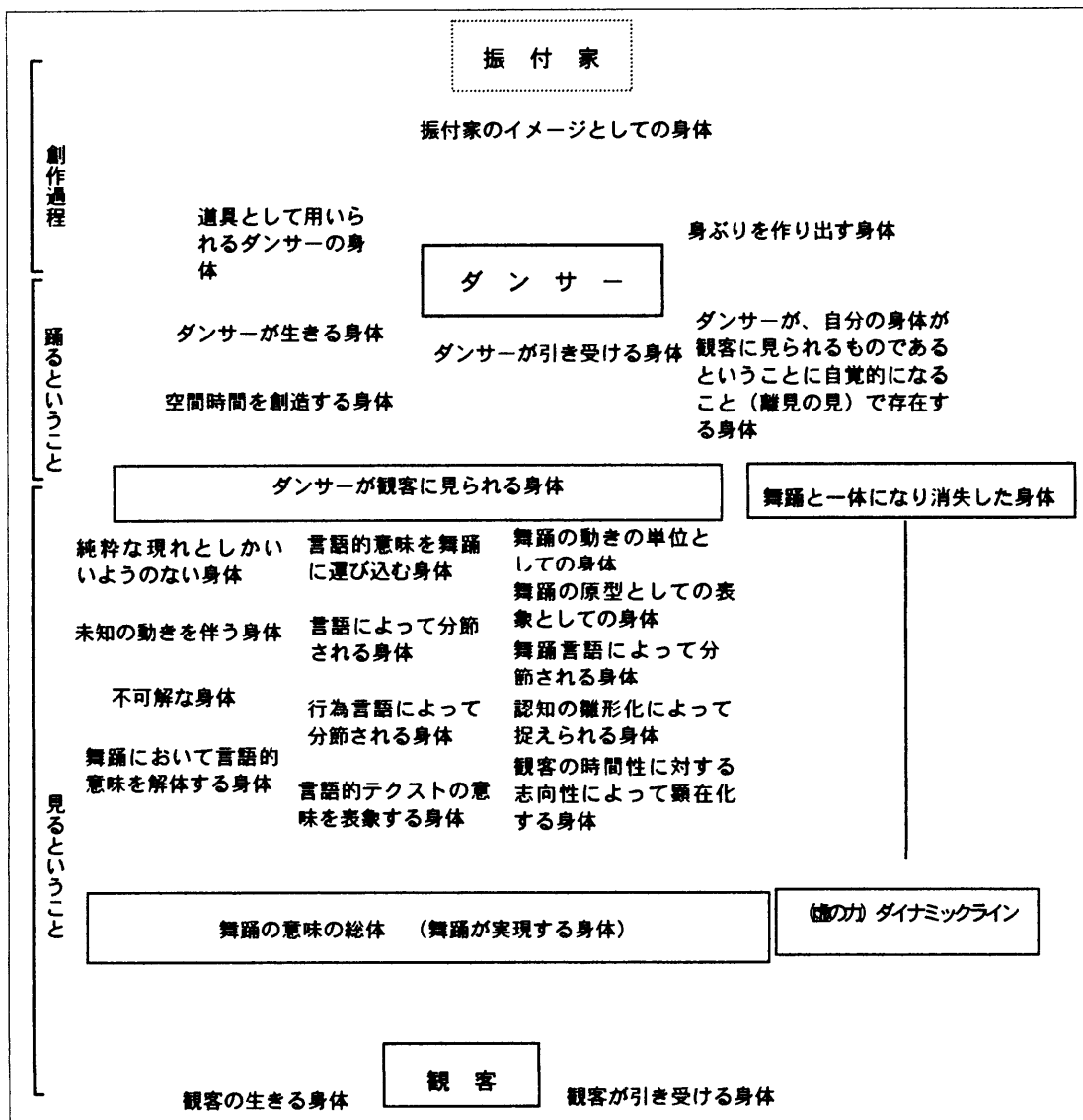


図1 舞踊の意味生成における身体的位置づけ



るのである。しかしながら、「離見の見」によって存在する身体は、ここでは最もダンサーに固有のもので、それは既に観客が受け取る舞踊の虚構世界（舞踊の実現する身体）を表象において先取りしているようなあり方を示している。この身体は、舞踊の内部にありながら、既に観客の存在の意味がその中に含まれており、舞踊の外部とのつながりが示されている身体である。そして、観客を決定的に立てることになる身体は「踊ること」と「見ること」の境目にある「ダンサーが観客に見られる身体」であり、この身体は他者の身体という意味で第1部で検討したものであるが、「ダンサーが生きる身体」とそれに加えて「ダンサーが引き受ける身体」である「離見の見によって存在する身体」などを観客から隠蔽し、観客に対して見られるものとして矢面に顕在化する身体として存在する身体である。また、この身体によって、観客とダンサーが例えば「見る－見られる」というような他者を双方に立てるような身体存在の原初的な意味も生じることになるのである。つまり、踊ることの内部におけるダンサーが創造する時間－空間性と見ることにおける観客が創造するそれとが接点を持ち、両者が互いに「いま－ここ－舞踊」と「いま－そこ－舞踊」という舞踊の現前を了解することが可能となるのも、この身体によってである。「ダンサーが観客に見られる身体」は観客がそれを見ることによって成立する身体であるが、そのようにして観客そのものも立てられているということになる。このように主に第1部で検討された身体は、舞踊の内部にあるダンサーの身体や観客がそれを見るという資格において生きる身体など舞踊の身体イメージが立ち上がる空間や時間、また、ダンサーや観客の成立基盤としての意味を持っているものである。

「ダンサーが観客に見られる身体」が立ち現れるや否や、観客は、その身体を様々なレベルで捉え、理解に落としてゆく。舞踊の身体を認知する過程は、観客が一つの身体イメージに対して、それを分節し分別してゆく構造を見て取ることが出来る。観客が身体に対して意味付与をするレベルは、日常的な言語の意味をそのまま用いて解釈をするレベル、言語によって既に意味の分節がなされているものを用いて解釈をするレベル、そして言語的な意味から逃れるようなフォルムのようなものに対して分節性のカタログを持って捉えてゆくレベル、さらにそこからみ出すようなあり方を示すレベルに分けることができる。この認知システムは完全に観客側の「見る」領域にのみ属している。事実上はここにおいて観客がその中に舞踊の固有の意味を捉えることが具体的に顕在化してくるところであり、我々がそのことについて分析可能な部分である。また、ランガーやシーツの議論を図の中に組み込むとするならば、虚の力が現出するのは、「舞踊と一体となった身体」であり、したがって身体は既に消失していると捉えることが妥当であろう。虚の力の現れにおいて舞踊の本質である「動的線性」をこそ観客が捉えるべきものであるとされており、その場合は、観客がそれを捉える対象としているかぎりにおいて、まさに舞踊の意味は虚の力であり、動的線性である。しかしながら、このような形相的性質を我々が捉えることができるということはランガーやシーツによると「直観」によってあり、

我々がこの論考の第2部以降で論議してきたことと領域を別にするにも関わらず、それは第3部で考察される「不可解な身体」と関係が深いと考えられる。それは、ランガーやシーツが言語的な契機を舞踊の本質的な要因とは見なさなかったことによって初めから言語的な認知領域を設定していないことに帰因することであろう。つまり、この論考で導出された不可解な身体は一方では言語的なものを足がかりするかぎりにおいては接触困難な身体であるということが考えられる。しかしながら、一方では観客は舞踊の中に様々な意味を見取っており、舞踊の身体やフォームや動きというものでさえもそれらが言語の意味と不可分な領域があるということは指摘し得るであろう。

以上、舞踊の意味の問題について、それをシーツやランガーに問うことから始まり、続いて観客が舞踊を認知しているという観点及び言語的な意味契機との照合によって考察してきた。最後に「舞踊の意味」というものをこの論考で取った立場から帰結するとするならば次のようにいうことが出来るであろう。

我々が舞踊から何かを認知レベルにおいて捉えていることが妥当であるならば、舞踊の意味とは、舞踊の中の認知対象及び認知対象相互の連関によって生じてくるもの全てを指していることになる。仮に、舞踊が意味するもの、すなわち舞踊において認知できる全てのものを数え挙げていくとするならば、身体はそのなかの一つとなるであろう。しかしながら、我々が舞踊の中に見いだす全ての対象は、ダンサーを中心として構成されていると捉えることが出来るのである。そのことはそれらの対象の意味が全てダンサーに関連づけられているということを示している。舞台の上に観客が見るものは、諸々の別個に意味を備えた対象物が並置した一つの世界ではなく、その世界の中心でダンサーによって諸対象が方向づけられている世界である。舞踊がもたらすものとは、全ての対象物の存在価値がダンサーの身体イメージの廻りに配置され連関づけられた有意味な世界として捉えることができる。舞踊の意味生成とは、舞踊が示す全ての対象物をしかるべく連関させ、舞踊を意味の世界として受け取る過程であり、それは観客が舞踊の呈示してくる身体イメージに対して、それを分節し分別し理解に落としていくことによってなされるということである。